展示・収蔵品より

美を知る 304

県立博物館（秋田市）

菅江真澄・鉱山の記録

山の姿をありありと

三河（現在の愛知県東部）で生まれた江戸後期の紀行家・菅江真澄（1754～1829年）は、各地を歩いてさまざまな記録を残したが、その中には「鉱山」に関する記録も含まれている。

図1は真澄が尾去沢鉱山（現鹿角市）の様子を描いたもの。真澄が当地を訪れたのは1820（文政3）年3月ごろと推定される。図絵中央、山全体に霞がかかり、「煙霞」の様相を呈している。図絵左下、家々が並ぶのは「笹小屋」の集落。また左上、「獅子沢」の集落にも家々や建物が並び、その周辺からは煙が細く立ち上っている。この煙は掘り出した鉱石を製錬する際に発生したものだろう。それはあたかもここが鉱山であることを誇示する狼煙のようにも見える。白と黒のみで描かれた、水墨画を思わせる図絵だが、江戸時代の尾去沢鉱山の様子をありありと描いている。

図2は阿仁鉱山（現北秋田市）の様子を描いたもの。真澄が当地を訪れたのは1804（文化元）年。「六ヶ山」と呼ばれた、小沢、真木沢、三枚、一の又、二の又、萱草のいずれかの様子だろうか。冊子見開きで描かれた図絵には、多くの家々や建物が並び、至る所から煙が立ち上っている。当時の隆盛ぶりがうかがい知れるような、堂々とした描きぶりだ。図絵後方、白く浮かび上がって見えるのは森吉山の山頂か。

さらに本図絵の後には、坑口周辺を大きく描いた図絵が続く＝図3。坑口からは廃水が流れ出ている。また坑口の上部をよく見ると「大幣」のようなものが立てられているのが分かる。事故が多発する鉱山ではこのようにして神仏への安全祈願を行っていたのだろう。

実は真澄はこれ以前にも何度か阿仁鉱山を訪れている。一番初めは1785（天明5）年のこと。旅の初期の写生帖である「粉本稿」には、阿仁鉱山のラフスケッチが描かれている＝図4。それに付された説明文には、

出羽の阿仁山というところで銅を掘り出している。鉱石を掘る穴を「しき」といい、掘る人を「大工」という。鉱石を入れて背負う入れ物を「えぶ」といい、鉱石を砕いて銅をとることを「はくをからむ」という。枯れた「すす竹」に火を灯して「しき」に入る。「しき」の中からは必ず水が流れ出る

（「粉本稿」より意訳）

と記され、鉱山特有の用語や用具などについて詳細に記録している。

また1802（享和2）年には、阿仁鉱山・真木沢の「はたけまぶ」を訪れた。間歩とは坑道を指し、当地ではそのまま地名としても用いられたのだろう。その時に描いた図絵（図5）を見ると、岩や土が崩れないように木材で覆道が架けられ、それが図絵左、坑口まで続いている。真澄はこの道を「楼架」と記している。

図絵中、この道を坑口に向かって進む人物が見える。手には「粉本稿」にも記されていた、「すす竹」に火をともしたものを持っている。背中には替えの竹も4本ほど準備しているようだ。これから仕事に向かう「大工」なのだろう。

灯りに用いられた竹は、春には山菜として食されるネマガリタケだ。鉱山で竹を灯りに使用する利点は、軽くて持ち運びしやすいこと、煙が出にくくにおいがしないこと、灰が落ちず防火上安全なことなどが挙げられるだろう。

真澄の関心はまた、鉱山で働く人々にも寄せられた。1803（享和3）年、真澄は大葛鉱山（現大館市）を訪れた。金の産出によって隆盛を誇った同山では、当然多くの人々が働き、人の数だけ物語も生まれた。鉱夫と鉱山主の関係性をよく表している滑稽話や、仕事上、短命になってしまう鉱夫を夫に持つ妻の悲話など、鉱山にまつわるさまざまな人の物語を真澄は書き留めている。

真澄が各地の鉱山に興味を引かれたのは、自身が本草学（動植物や鉱物などを含む博物学的な学問）に精通していたことも関係するだろう。可能な限り鉱山の記録を残そうと試みた。また民俗学的な観点から鉱山特有の言葉や道具への関心も高く、何より汗と涙を流し、懸命に鉱山に生きる人々の姿にこそ、観察者・真澄の目は向けられていた。

（県立博物館学芸主事・角崎大）

図1　「菅江真澄翁画」（県指定文化財「菅江真澄著作」の1冊）より　大館市立栗盛記念図書館蔵

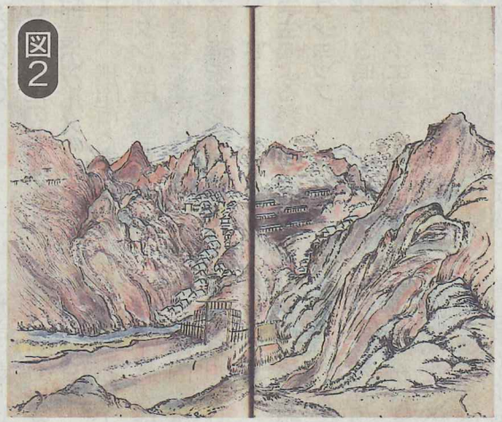

図2

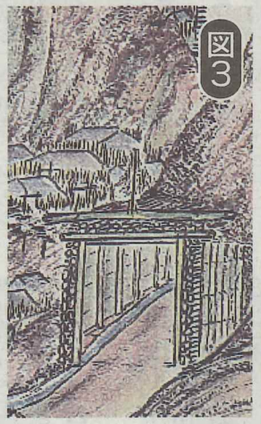

図3

図2、3とも「阿仁の沢水」（重要文化財「菅江真澄遊覧記」の1冊）より
※図3は元図を部分拡大したもの

図4　「粉本稿」（県指定文化財「菅江真澄著作」の1冊）より　大館市立栗盛記念図書館蔵

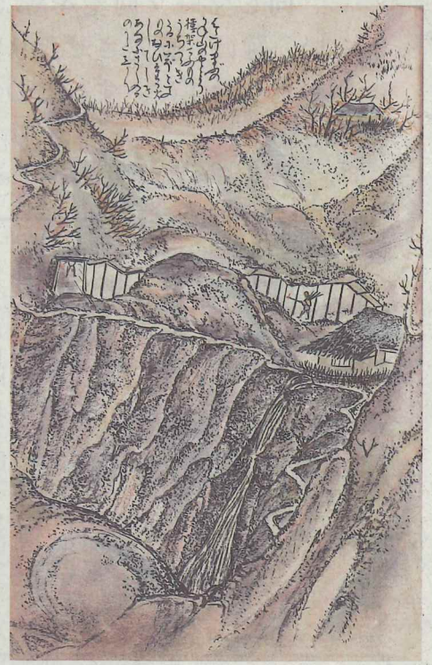

図5　「雪の秋田根」（重要文化財「菅江真澄遊覧記」の1冊）より

メモ　県立博物館内の菅江真澄資料センターでは30日まで「初学者のための真澄展」を開催。真澄の旅の目的や秋田との関係などについて、資料と共に解説している。入場無料。開館時間は午前9時半～午後4時。月曜休館。同館☎018・873・4121